

それじゃあ、本編で話せなかつた内容を中心に補足していくよ。

■リラックス

眼力と言っても、目に力を入れて物を見る必要性は無いからね。

眼力を使いたい時には目を大きく見開くよりは、どちらかというと力を抜いて物事を冷静に観察できる半眼状態の方が意識的にも観察しやすくなるはずだよ。

■打ち気について

打撃を放つ前に放たれる意識「打ち気」は、慣れてくると簡単にわかるようになるよ。

これは感覚としては電流やパルスのような感じで飛んで来るからね。

人によっては脳の一部が光るようなイメージで感じることもあるね。

眼力を発動していると、打つ意識が起きた時にピンと意識が届いてくる。

ほとんどの人間は動きの修練はしていても、こうした意識の修練はしていないからね。

いくら動きが速くても、意識がテレフォンパンチ状態になってちゃ見切られるのは当然さ。

この稽古を進めていくと武術に役立つだけじゃなくて、人の視線や意識の線「意線」にも敏感になるからね。

誰が誰を見ているかもわかるし、極めればその視線にある意識が好意なのか悪意なのかなどの相手の意識状態までわかるようになるから、他人の拳動を知るにも最適な感覚だね。

■古物商

骨董での目利きはこの能力を持っている者が多いね。

自分が知らない知識の物品でも何となく触っただけで物の価値がわかるのは、こうした感知力の高い肉体センサーで良い物・悪い物を何度も触ってるから触った瞬間の反応で物の善し悪しが測れるわけだね。

ちなみにこの水の体はメモリー能力も高いので、一旦良い物や一流の物を触れたり味わっておくと、それをメモリー出来るから物事の判断をするのに便利だよ。

普通の人間は何度も何度も同じ事を経験しないと物事を理解できないけど、水の体があれば、こうした回数を極限まで減らして最効率で物事を理解・習得できるからね。

■眼力の注意点

こうしたセンサーモードが発達し過ぎると相手の底や本性がすぐわかるようになるから、人によっては人間不信になることもあるね。

そういった時には丹田を鍛えて、ちゃんと重心をハラに置くことで精神のブレを回避することもできるから、ちゃんと覚えておくんだよ。

■感知

相手に直接触れた時に、あんたの体に流れ込むものがあるから、それを感じれば相手の意識状態をより深く感知できる。

この感覚を利用して、他者の意思を感じたい時は「他人の意思」を絵の具の色として感じてみるといいね。

相手の意思があんたの体の水の中に溶け込んだときに、どんな色になるか？それで相手の意図を感じるわけさ。

水の中にどんな濁りが生まれるか？どんな反応が起きるか？

これらを極めていくと、相手を見た瞬間に自分の中の水が濁ったり清くなったりするから、それで相手の意図や性根を見抜くことも出来るようになる。

■マッサージなどの治療の話（重要）

こうした接触技法に習熟すると、相手の体を触るだけで毒気を吸い出してヒーリングを行うことも出来るようになるよ。

やり方としては、相手の体に触れながら相手の水の中にあるヨゴレを自分の水の中に移して相手の水を綺麗にしてあげるイメージだね。

マッサージ等をあわせて行えばさらに効果的さ。

ただしこのやり方は自分のエネルギーを相手に与え、相手の毒を引き受ける方法だから、やるなら自分が元気な時にするか、もしくは毒を吸った後に20～30分位はぬるめの風呂で半身浴をして毒を汗にして排出しり、魔法使い入門8巻のような大きな方法でエネルギーを補給した方がいいね。

マッサージ師やヒーラーが病気持ちだったり短命になりがちなのは、実はこの毒を吸い出すという行為を無自覚にしているケースが非常に多い。

相手を思いやる心というのはそれ自体は高度で素晴らしいものなんだけど、それと同時に相手にシンクロしやすくなるから、相手の毒を一手に引き受けがちになるからね。

つまり…情が深かったり、相手を思いやるマッサージ師であるほどに、毒の効率の良い抜き方を学んでいるか、宇宙や自然との交流方法（気功等）を身に着けていないと、毒という見えない内部ダメージが大量に蓄積して、やがては自分の体がボロボロになっちゃうからね。

（他人をマッサージすると運動量の割には疲れたり、じっとりとした嫌な汗をかいたりするのも、この「毒」が原因になっている事が多いね）

他人の心身とシンクロするだけで、良くも悪くもあらゆる情報をやり取りしてしまう。これも流体技法の特徴の1つだね。

ちなみにマッサージ師に肥満や痩身が多いのも、これが原因の1つさ。

肥満タイプは毒を入れないように脂肪で防護壁を構成しているケースが多く、痩身は患者に精気を与えて毒を吸いすぎてやつれているケースが多い。

中にはケロッとしている人間もいるけど、このタイプの殆どは「相手に無関心」なケースが多い。

つまり単なる仕事や金儲けで行っていて、他人を癒すことをミッションにしていないタイプだね。

このタイプのマッサージは基本的にはマッサージチェアと同じようなもので、人の体を物理的にしかほぐせない。

だから根源的な問題である「毒」や「精気」の意味ではあまり効果が無いね。

この法則は、基本的にはよほど選ばれた才能や特殊能力、特殊な稽古をしていない限りは万人に当てはまるからね。

あんたがもしもマッサージ職にかかわっているなら、このあたりの知識は覚えておくと損はないよ。

■主（ぬし）という認識

今話した内容は規模を広げていくと深い叡智になるよ。

つまり…他人を触ることで癒せるならば、その人がそこに存在しているだけでも周りを癒す人間や周囲に良い影響を振りまける人間、いるだけで世界を平和にさせる人間も存在しているんじゃないかなって推測だね。

その推測は正解だよ。

これが理解できると、ただそこにいるだけで家系や会社が回ったり、国家が回ったり、星がうまく回るようになる気配を持つ人間が存在するという事実に気付けるようになる。

昔の人間はこうしたタイプの人間を「主（ぬし）」と呼んだりして、供物を捧げて丁重に扱って、その恩恵にあやかっていたんだけど…。

今の人間はニブチンばかりだからね。

こうした特殊な気配持ちの人間は、大抵はおおらかで物事に頓着がなく、ぐーたらで選り好みが激しく、いわゆる今現在の競争社会には全く適していない。

つまり…。

「自分がいることで周囲は平和になりうまく回るけど、本人自身は何が出来るわけでもない」

「他人の器や力に干渉してその結果をブーストしてやることは出来ても、自分の食い扶持を稼げるわけではない」

「当人がいることで星の天変地異を防げても、それを誰に評価されるわけでもない」

という、センスが無い人間だらけの現代社会にとっては本当に生きにくいタイプだね。

こうしたタイプは、眼力のある人間が見れば「キーパーソン」に映るんだけど、普通の人間からしたら単なるグータラや天然ボケ、役立たずに見られるケースが非常に多いからね。

その人間一人を抱え込めば会社は10年で100倍に成長できるのに、社員としての適正には欠けているから、社員一人分の給与を払うのがもったいなくて雇わない経営者や、そもそも特性を見抜けないから役立たずとして雇わないケースも多い。

これは、あたしの目線から見ればマヌケとしか言いようがない行為さ。

大昔の社会では、こうした主タイプの人間は、基本的に供物を捧げてシンボルとして崇めたり、生活を社会単位で保証してあげていた。

で、生活を保証される代わりに、主はそのコミュニティに恩恵を与えていたわけだね。

この考え方はとても先進かつ合理的で「101人が働いて101の結果が出る」よりも「100人が働いて1人が遊んで500の結果が出る」ほうが良いのは言うまでもない。

でも、今の社会じゃ「101人全員に働くかせて、1人としてサボりを許さず、それでいて500の結果を求める」わけだけど、それは虫がいい話だし、適材適所をまるで考えていない愚行さ。

芸能界だと、こうした主のフリをした偽者がわんさか溢れています、眼力の無いプロデューサーたちが騙されているけど、本来の主タイプってのは自分の演出があまりうまくないからね。

ガンガン自分を前に出す芸能界が偽者だらけなのは当然の話さ。

(もっとも…最近じゃ主も進化したのか、少しずつ生存戦略を覚え始めて、社会に順応してきているタイプも、ちらほら見かけるようになつたけどね)

本当の主というものは基本的には眼力がないと見極められない存在だからね。

あんたはセンスがいいから、こうした知識を手に入れることで、主を見つけ出すことも可能になるはずだよ。

こうした眼力は本来なら政を司る人間たちが真っ先に持たなきやならない能力なんだけど、一昔前なら少しばらはマシな人間がまだ財界や政界にいたけど、今はトータルでソロバン勘定できる人物が減ってきてるからね。

これらの眼力の無さは、国にとっては長期的に見れば致命的だね。

ちなみに搾取の系譜の最上位層、古くから存在する富裕層はこうした概念を理解しているよ。見ず知らずの無名画家に惚れ込んで経済支援をしたり、町の冴えない花屋の娘に求愛するのは金持ちの気まぐれなんかじゃなくて、基本的には他人が見えない運気や才能を見出してそれを自分の所有物にしているだけさ。

(知識があるものは更に豊かになり、無知なものは更に貧しくなるわけだね)

こうした考え方や視点は個人規模から社会規模、星の規模から時間軸の規模にまで展開していく重要なもののだけど、これは基本的に「エクスキューショナー」シリーズで詳しく話している内容だから、興味があるならそちらも見ておくといいかもだね。

眼力のレベルが上がればわかるだろうけど、あの死神の子は見た目通りの可愛らしい子ってわけじゃないからね。

悪意ある存在じゃないけど、セルシアの姉さんと同じく、どこか底知れない未知数の力っていうか、そんな強力な何かを感じるよ。

■意識のクオリティや「先の先」について

人の意識は意外とわかりやすい。

例えば怒りならば赤い色。

良からぬ企みや邪悪な意思なら重たくへばりつくような黒い霧のような物。

ピュアな精神なら透き通った水や爽やかな空気、光のシャワー。

悲しみは落ち着きのない激流や降り注ぐ雨。

冷酷なビジネスマンの作り笑顔なら、温度の無い鉄やオフィスビルの無味乾燥な壁。

搾取系の人間なら冷血な爬虫類や温度を感じさせない機械と言ったところだね。

ああ、あんたの場合は武に興味があるんだったね。

臨戦態勢に入った者同士は空間に緊張が走ったり、空気が張り詰めて重くなるね。

人によっては張り詰めた空間にぴりぴりとした電流を感じるかもしれない。

あと、さっきも話した内容にかぶるけど、人間は攻撃動作に入る前に意識を放つからね。

こうした意の起こりや打ち気は、要は今から打つぞと意識した瞬間の脳波のような物だね。

これはイメージ的には電流やパルスのように走っているから、流体化での眼力が出来ていれば感じ取るのは容易いよ。

達人はこうした「意の起こり」を消すのがうまいけど、準達人くらいまでなら打つ前にどうしても意が出ちゃうからね。

こうした意の起こりをとらえて、相手が動き出す前に先手を取るのが本当の「先の先」さ。

相手が動き出してから反応してたんじゃ間に合わないからね。

相手が意識をした瞬間を、当人よりも早く察知して機先を制する。

それが先の先の秘訣だね。

この先の先は便利だけど、頭で感知できても肉体がついてこれなきゃ意味が無いからね。

だから武術の「先の先」に関しては、感知に合わせて動ける超速反応系の技法と連動させなきゃうまく立ちまわることは難しいだろうね。

■共感覚を利用する

耳で聞く→体の水で音で感じる。
目で見る→体を濁らせる色で感じる。
臭いで感じる→水の体に沸き立つ臭いで感じる。
味で感じる→水の体に浮かび上がる味で感じる。
気配で感じる→水の体にしみこむ気配や触感で感じる。

こんな感じで体感覚を水の体を通して感じると、普通の人間じゃ考えられないレベルのセンサーを所持することができるよ。

音を聞いて水の体がどう反応するか？

景色を見て、人を見て、体内の水がどう反応するか。

通常のセンサーは外側の事象に応対しながら、同時に体内の水の変化をつぶさに観察していく。この相反する2つの行為を高いレベルでこなすようになると、あらゆるものを見ただけで理解したり超人的な眼力や物事の本質を見破する力、相手の器や性根を見切る力が手に入るね。

■年齢とプログラム

物理の理で生きている生物というのは、基本的に年をとることで衰えはしても強くなることはない。

だからこそ年齢を経てなお強い達人は何らかの仕組みを持っていると考えなきゃならないわけだよ。

こうした極意技法は既存の運動プログラムの書き換え行為にも等しいね。

既存の運動プログラムはメモリ消費の点では楽で効率はいいけど、パフォーマンスの視点で言えば決してベストではない。

つまり「廉価版のCPUによる最低限の簡易運動プログラム」みたいなもんだね。

けれど、より極まった動きを行うには既存の簡易なものから、より複雑なプログラムへの変化が必要だし、それに伴って強力なCPUも必要になる。

こうしたモードが使える人間はレアだからね、というよりは…この時代の人間は生活が忙しすぎてこうして自分の内面に潜る機会を著しく無くしてるので実際だね。

だからほとんどの人間は力を使いこなせなかつたり、答えがわからず迷つたりするわけだけど、それは能力を失ったわけではなく単に使わないから衰えているだけにすぎない。

だからこうして鍛えていけば、力を取り戻すのは簡単さ。

(それにあんたの場合は元からの才能もあるからね)

■日常生活で使用する

この技法はまずは体を静止させて心静かに観察する行為から行うといいけど、やり方に慣れてくれば、その内に会話の最中にでもこのモードに入れるし、日常生活の中で常時発動することも可能になるよ。

これが出来るようになれば人材や才能の発掘も簡単さ。

というか…こうした非言語能力が発達していなければ、逸材の発掘や能力者の発見なんて出来ないんだけどね。

その意味じゃ今この国にいる人事とかぬかしている奴らは全てお話にならないし、こうした「無能力者」が選び出す人材程度じゃ、この国の本格的な沈み込みを止めることは出来やしない。

その意味でも、あんたがこの眼力を所持することは社会やより大きな枠組みに対して、とても大きな貢献をしていることになるね。

■最後に

何度も言うけど、相手を見抜く力を持っていない者は狡猾な奴相手にいとも簡単に騙されちゃうからね。

どんなに強くても人を見極める目が無けりや何の役にも立たないし、いいように操られておしまいさ。

あんた自身のためにも、魔法使いが使う非言語と合わせて、この技法はしっかりと身につけておくんだよ。